HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	補助動詞「ゆく」「くる」の意味と用法
Author(s)	三上, 勝夫
Citation	北海道大學教育學部紀要, 25, 35-51
Issue Date	1975-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29118
Type	departmental bulletin paper
File Information	25_P35-51.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

補助動詞「ゆく」「くる」の意味と用法

三　上　勝　夫

Use of Auxiliary Verb "Yuku", "Kuru"

Katsuo Mikami

概　　要

この研究は，わが国の言語に内存する諸法則の解明，及び学校における実験的授業の双方から，国語教育における言語のとりたて指導の内容及び方法の確立，改善を企図する一連の作業の一環としなされたものである。

本論文は補助動詞「ゆく」「くる」の用法分類をその作業の内容としているが，これは言語指導の分野における近年の著しい成果と目されている明星学園・国語部著『にっぽんご４の上』の理論的，実践的検討の途上で，いま少しくわしい研究の余地ありと考えられるものの一つに，理論的な角度から検討をくわえたものである。

本論文の目的は，従って直接には「ゆく」「くる」の用法の解明にあるが，これ等を一つの資料として，わが国の言語の特質であるところの多様に発達した補助動詞，及びこれにともなう一連の文法的カテゴリーの総体的な把握に至ることをゆくゆくの目的としており，ひいては学校における言語の指導に何らかの提言がなされ得ればと期待されるわけである。

目下のところは，いる，しまう，あるなどの「すがた動詞」，やる，もらう，くれるなどの「やりもらい動詞」，みる，みせる，おくなどの「もくろみ動詞」―これらはいずれも『にっぽんご４の上』にくわしくふれられており，指導がなされるようになっている。―などと並んで，その表現力のゆたかさ，使用の頻度などからも「ゆきき動詞」とでもよぶべきものが項の一つとして立てられてもよいのではなかろうかということと，「ゆきき」もふくめて，これらが張る文法的カテゴリーをより構造的に体系づけることが必要なのではなかろうか。ということが予測されることのなかみである。

本論文の方法は，すぐれた作家達によって歴史的にみがきあげられ確立されてきた現代日本語のなかから資料を得，これを分析するという実証的なものである。それゆえ本論文の結論的部分はもっぱら客観的資料が語り得るものに限定したつもりである。が，資料を分析，解釈する視点はそれはそれとして相対的に独立したものであり，筆者の主観に随するところが散見される可能性を否定することはできない。

(1)

のぼって　ゆく

ぼんやりして　くる

「ゆく」「くる」は，このように動詞の第二中止形（いわゆる連用形＋「て」）に付いて，ゆるいあわせ動詞[1]をつくり，これに一定の語彙的・文法的意味を添える。

いま，便宜的に，「のぼって」「ぼんやりして」の部分を「動詞」，「のぼってゆく」「ぼんやり

してくる」を「あわせ動詞」と呼ぶこととする。「ゆく」「くる」は一括してとり採かうときは「ゆく・くる」とし，それぞれについて述べるときには，「ゆく」「くる」と使いわける。

補助動詞として用いられる「ゆく・くる」の意味は多義的であり，この意味の違いをもたらす用法は，この多義性に応じていくつかに分類できる[2)]。用法の分類とはこの場合，とりも直さず「あわせ動詞」の諸タイプを抽出することに外ならない。

例1　つぎには，家でかいてきた，かれらの綴方用せんなり，原稿用紙なりみようではないか（国分）

例2　ここまで書いて来て，何度となく此様なぶちまけを書くことに私は嫌悪をもよをして来たのだけれど……（芙美子）

この例では，「動詞」の語彙的意味には違いはないが，「あわせ動詞」の意味は明らかに異っている。前者は書くという行為ののちに行為者が移動する（この場合，語り手の視点に行為者が近づく）ことをあらわして，いわば空間的カテゴリーの内にあるのに対し，後者は，書くという行為そのものの進行を問題とする点で，時間のカテゴリーの内にある。

例3　この寄せ書きに対しては間もなく幸子宛に返事が来，あれを繰り返し身に泌みてうれしく読んだこと，……こと，などを感傷的に書いて来たが，それから又暫く音信が跡絶えた（潤一郎）

同じく空間のカテゴリーの内にあっても，この例になると，移動するのは行為者ではなく書かれた内容や情報が移動，伝達されることをあらわす場合の特殊な用法となる。

同様に

例4　正直の所，それ等がそのまま，二十年も小説を書いて来た本書の著者が，長いこと気にかけていた疑問であった（整）

では，時間のカテゴリーの内にあっても，ニュアンスを異にし，行為の進行，展開というよりは，一定期間におけるその行為の持続（とくにこの場合，行為者の経験）をあらわしていると思われる。

「ゆく・くる」の意味＝用法の多様性，つまりは「あわせ動詞」のタイプの多様性は，これら若干の例からも充分確認されるとして，さて，この多様なタイプを分類する原理はどのように立て得るであろうか[4)]。

初めの二例でいえば，しどころを示すかざりの語[5)]「家で」と行為の進行の到達点を示すかざりの語「ここまで」とが両者を区別するいわば示差的特徴をなしているであろう。このような文法的（この場合連語論的）特徴を，いま形式的特徴と呼んでおく。

が，

辞めて　きた

生きて　きた

におけるカテゴリー的相違（時間・空間の）は，形式的特徴を，それが置かれている文脈にあえて捜すことがなくても，普通にみて，明瞭ではなかろうか。ここでは，たすけられる「動詞」の語彙的意味の違いが「くる」の意味を異なったものとして規定しているのである。この側面を内容的特徴[3)]と呼ぼう。

ここでの作業の仮説としてはつぎのように考えたい。

「ゆく・くる」のそれぞれのタイプの意味は，語彙的意味の側面において典型的な内容的特徴を有するそれぞれの一群の「動詞」に対応している。

そして，この典型的「動詞」による「あわせ動詞」は頻繁につくられ，それぞれのタイプの意味は確定的なものとして実在している。

例えば

愛する　たえる　我慢する

などの心理状態をあらわす特定の動詞は，

経る　過す　暮す

などの生きるということに関する動詞などとともに「ゆく・くる」と結びついて，行為・状態の持続をあらわす「あわせ動詞」をさかんにつくっている。

例5　……謂わば寄託の義理を思って，今日まで随分辛い事が有っても我慢して来たのだけれど……（四迷）

例6　……だまってそれを受けていいくらぬの苦悩は経て来た（太宰）

こうして，それぞれのタイプの意味＝用法が典型的なし方で確定したものとして存在することが，さらに一般に，いわば非典型的な動詞をも，どれかのタイプの「あわせ動詞」に引きずり込みうる根拠となっているのである。これは可能性としての根拠とでも呼び得ようか。

そして，それらの動詞が引きずり込まれる場合，すでに典型的なものにおいて固定されている形式的特徴（すでにのべたようなかざりの語のとり方）を踏むことは，それがつくる「あわせ動詞」が実現するためのこんどは現実性としての根拠となるのである。

はじめに例としてあげた

書いて　きた

の多様性は，このようにしてしか説明できない。

(2)

「ゆく・くる」の付く「あわせ動詞」の意味＝用法の分類においては，時間と空間のカテゴリーへの二分が，最も基本的である。

この区分はもちろん，直接には補助動詞としての「ゆく・くる」の部分が担っている意味の違いによってもたらされている。

時間と空間との区分は，元来の動詞としての「ゆく・くる」の意味の多義性に由来していることは疑いない。

「ゆく・くる」はもともと，空間的な移動を指し示す動詞であったろう。この本来の空間的性格を，そのまま保有しつつ補助動詞化した「ゆく・くる」によってつくられる「あわせ動詞」は，空間のカテゴリーに分類されるのである。

このとき「あわせ動詞」の意味は，「動詞」の指し示す行為と「ゆく・くる」のあらわす空間的移動とが，何らかのしかで重なり合ったものとなる。

ところで，「ゆく・くる」は，すでに知られているように，その語彙的意味に，語り手との関係を含んだ「境遇性のある語」[6]である。

大ざっぱにいえば，「ゆく」も「くる」も同一の移動行為を指し示し得る。それが「ゆく」と表現されるか「くる」と表現されるかの選択は，もっぱら，語り手が行為を観察する視点にかかわっている。

「ゆく」が採られるのは，移動の方向に対して，語り手の視点が，行為者が遠のいてゆくという位置関係にある場合（視点A）であるし，「くる」が採られるのは，視点が，行為者が近よってくるような位置にある場合（視点B）である。

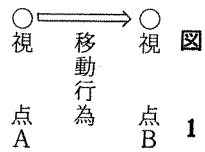

図 1

時間的なものとしての「ゆく・くる」は，空間的なものからの転成と考えら

れる。

ゆく年　くる年

のように，語り手の視点に対して，近ずく，遠のくといった「境遇性」は，この転成にあって，本質的に保存されている。

時間的なものとしての「ゆく・くる」の存在は，時間のカテゴリーに概括される「あわせ動詞」がつくられるための何らかの条件であったろう。

(3)

空間的カテゴリーの内に属する「あわせ動詞」は，

(a)　「動詞」の指し示す行為と「ゆく・くる」の示す「境遇的」移動とが順次に生起することをあらわす。

(b)　行為と移動とが同時に生起することをあらわす。

(c)　「動詞」はすでに移動をあらわす移動動詞であるが，「ゆく・くる」はこれにとくに「境遇性」を付与する。

の三つのタイプに分類できる。

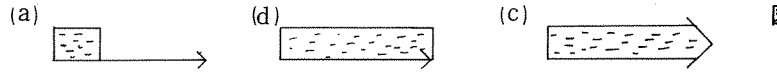

図2

もちろん，こうしたタイプの違いをもたらしているのは，基本的には「動詞」の語彙的意味の性格の違いである。

(a)のタイプをつくる動詞の典型的なものは「ゆく・くる」の示す移動動作と同時的には非両立であるような行為を指し示す動向であるし，(b)の場合は，逆に両立可能な行為を指し示す動詞でなければならないし，(c)は，両立可能であることはもちろんのこととして，もっぱら移動をあらわす移動動詞であるというように。

(4)

空間のカテゴリーの(a)のタイプの「あわせ動詞」は，すでに述べたように，「動詞」の示す行為をしてのち，行為者が行為のおこなわれた場所を離れる（「ゆく」が付く場合は話し手の視点に対して遠ざかる。「くる」の場合は近づく）ことをあらわす。

このタイプの「あわせ動詞」には，とくに典型的と思われる動詞群は見当らないが，例えば，日常の寝食，遊興，交際などにかかわる動詞は，よくこのタイプで用いられる。

例7　顔を洗って来て本を見ている。……僕は飯を食って来る（鴎外）

例8　ゆっくり話して行け。酒を飲むなら酒を出そうかという（〃）

例9　一日湯に入ったり昼寝でもして遊んで行かれるようにしてある（花袋）

例10　島へ行ってあのひとと会って来よう（芙美子）

例11　私がそこを訪ねた時，彼は私に泊って行ってくれと言い……（整）

例12　それじゃ僕はお湯に入って来るよ（康成）

また，何らかのものの取得，遺失等にかかわる動詞も，しばしばこのタイプの「あわせ動詞」をつくる。

例13　何か彼の仕事の上での必要物があると，私はすぐ飛び出して行って，それを捜してくるなり，借りて来るなり，買って来るなりしてやる身構をしていた（整）

例14　夏になるとそれを連れて山へ来て，山での収入を取上げて行ったそうだ（直哉）

例15　どうしても少しお金を拵えて来なくってはね（花袋）

例16　……お嬢さんと私を二リキリ残して行くようなことはなかったのです（漱石）

例17　然し間もなく，今日艶書を落して来たことを憶い出すと彼はぎょっとした（直哉）

例18　それにしても子供を捨てて行くっていうのはまあ，大したもんですわ（達三）

これらの例からも明らかなように，このタイプの「あわせ動詞」をつくる動詞は，それが指し示す行為が「行く」「来る」という移動行為と同時的に再立し得ないかあるいはしないことが特徴である。逆に，このようなものであれば，大ていは，このタイプの「あわせ動詞」をつくり得る。

例19　……私，何にも事情を言わずに，無理に頼んで来たでしょう？（四迷）

例20　……帰りがけに今日我引移るべき下宿を極めて行くことは全然忘れて！（〃）

例21　……せめて電話でなりと，お暇乞をして行こうかしらと思った（〃）

例22　確かに僕はこの耳で聞いて来た（藤村）

例23　……江の島，鎌倉あたりを見物してきた（〃）

例24　もう一人人的資源をつくってこい（栄）

さて，このタイプの「あわせ動詞」を他から区別する形式的特徴といえば，まずしどころを示す「で」の付いたかざりの語をとり得るところに求められるであろう。

例25　食事時にはよそで飲んで来ていて酔ってわめくもの……（整）

例26　……夕飯は汽車の食堂で済まして来るだろうとか……（潤一郎）

例27　彼は前夜，町で買って来た帝国文庫の高僧伝を……（直哉）

もっとも「置く」「残す」「落す」などくっつくところを示す「に」の付いた対象語（構文論的には）をとる動詞のような場合は，対象語は場所をあらわしているので，しどころをも含意することがあると見るべきであろう。

例28　あれを人質としてここに置いて行かう（太宰）

例29　しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです（漱石）

他方，このタイプは，「あわせ動詞」としては，でどころを示す「から」ゆくさきを示す「へ」「に」の付く飾りの語をとることはない。強いて，これをとろうとすると，「あわせ動詞」としての構造を壊さなければならなくなる。

例30　……老人を置いてこっちへ来てしまったことがすまないような気持になるのであった（佐多）

ただし，「買う」「さがす」などがつくる「あわせ動詞」で，ものの移動をも含意しているような場合には，「から」の付く状況語をとることもある。これらは，実質的には，もはや(b)のタイプにずれ込んでいるものと見ることができる。

例31　「なに雄はいないのだが，どこかで子種を貰って来たよ」

「一里四方人家のないところで，どこから貰って来たかな」（直哉）

この(a)のタイプの「あわせ動詞」が実際に使用されるとき，とくに，つぎのような意味的な対立のなかで用いられることが多いので最後に指摘しておこう。

遊びにゆく⟷遊んでくる
↕　　↕
遊びにくる⟷遊んでゆく

例32　主僧は昨日出かけて半日遊んで来て，「……ちょっと遊びに行くには好い……」と前の地主に話していた（花袋）

例33　「……そうして何もかも忘れて　って，今日一日愉快に遊んで来よう。ね，小夜さん，そうしよう」「遊びに行くのですか？」（四迷）

(5)

空間のカテゴリーの(b)のタイプの「あわせ動詞」は，「動詞」の指し示す行為をしながら「ゆく・くる」の移動動作がなされることをあらわす。

この場合は，「動詞」の語彙的意味の特徴として，「ゆく・くる」という移動動作と両立可能な行為をあらわしていることが必要である。例えばつぎのように。

例34　番台を頭の上に戴せて太鼓を叩いて行く……（花袋）

例35　辨當箱を振廻して行くもあれば，風呂敷包を頭の上に載せて行くもある（藤村）

例36　使いに走ってゆくらしい子供が，寒さに慄え声をあげながら年の始めの歌を唄ってゆく（佐多）

このタイプをつくる動詞のうち，とくに典型的と思われるのは，「持つ」「押す」などの「ゆく・くる」と結びついて，物を運搬する意味の「あわせ動詞」をつくる動詞の一群である。

例37　鍬を擔いで行くものもあり，俵を背負って行くものもあり……（藤村）

例38　……女学生風の女が，風呂敷包を重そうに提げて行く……（四迷）

例39　娘は携えて来た弁当を……（花袋）

例40　お上さんは一丁ばかりおっかけて来て，お米をゆさゆさ抱えてきた（芙美子）

例41　竜岡は父の写真を一枚持って行ってる筈だった。(佐多)

例42　……子供を教授夫人が見てくれと抱いて来た（整）

例43　トロッコに一杯石炭を積んで他の人の受け持場まで押して行った時だった（多喜二）

例44　……車を曳いてくる百姓の顔は……（花袋）

例45　……行ったら是非捜出して，首に縄を附けても引張って来てくれと……（四迷）

例46　晃一は章子に手を引っぱられて行った。(佐多)

注目したいのは，この例で「かつぐ」から「抱く」までの動詞は，動的な行為部分と，行為の末尾の局面（行為の結果としての状態といってもよいか）の継続部分とから成っているが，「ゆく・くる」との結びつきでは，継続部分がとくに強調され，前面におし出されて来ると考えられる。

「すがた」的であるといってもよい。

ゆっくりと　背負う
しばらく　背負って　いる

前者は，物を取りあげて背にのせるまでの行為，後者は，物を背にのせた状態の持続をそれぞれあらわしていることは明らかである。「ゆく・くる」の結びつきは，ちようどこの例の「いる」の結びつきと同様の効果を担っているのである。

この事情は，つぎの装いに関する（とでも呼ぶべき）動詞群では，いっそう明瞭である。

例47　お母ちゃん，あたし，これ着てゆく？（佐多）

例48　此人は袴をはいて来ているが……（芙美子）

例49　あたまには，おかあさんのつくってくれた，わたいれの，ぼうくうずきんをかぶっていきました（今西）

例50　……香水ぐらいつけて行くといいわよ……（芙美子）

道ずれ動詞とでもよぶべき一群の動詞も，このタイプの「あわせ動詞」を頻繁につくっている。

例51　その二三間後から秤を乗せた手車を挽いた仙吉がついて行く（直哉）

例52　浮かれ節より他に芝居小屋に連れて行ってもらえなかった……（芙美子）

例53　まさか紳士と淑女に連れそって来た私が……（〃）

例54　丑松は先に立って，……山深く叔父を導いて行った（藤村）

例55　私はこの前に一度連れられてきたので知っている（佐多）

最後の例のように，「連れてゆく・くる」は受身の立場をとる場合，「連れられてゆく・くる」となるのが普通と考えられるが，「連れてゆかれる」「連れてこられる」のように「ゆく・くる」の部分が受身の立場の形となって，用いられることもある。

「あわせ動詞」としての結びつきの強さ，慣用的固定の証拠ともなろうか。

例56　ところがね，せんどうさんがせんそうにつれていかれて，しんでしまったの（栗栖）

例57　周施屋にだまされて，連れてこられた東京の学生上りは……（多喜二）

さて，このタイプの「あわせ動詞」の形式的特徴は，それをつくる「動詞」は，元来はゆきさきの「へ」「に」，でどころの「から」の付くかざりの語をとらない（すなわち，その語彙的意味のうちに移動の意味をもたないので「へ」「から」をとる必要性がない）が，「ゆく・くる」の添った「あわせ動詞」は，こんどは「へ」「に」「から」をとることができることである。これが(a)のタイプとのいちじるしい違いである。

例58　ねえ，これ発送部へ持って行ってよ（芙美子）

例59　お茶道具を下から持って来て……（太宰）

例60　「チョッと」給仕が風の当らない角に引張って行った（多喜二）

例61　……樺太や北海道の奥地へ船で引きずられて行く（〃）

例62　わざわざここまで父についで来る人が，どうか失望して呉れなければいいと……（佐多）

例63　そんなに騒ぐ子，ふみえさん五反田へ連れてゆかないってよ（〃）

(6)

空間のカテゴリーのうちの(c)のタイプの「あわせ動詞」は，それをつくっている「動詞」が，その語彙的意味のうちに，すでに空間的移動の意味をふくんでいるものであることを特徴とする。

従って，前の二つのタイプとは異なり，「ゆく・くる」には，移動そのものの意味を添える役割はことさらにはなかろう。すでにふれたように，もっぱら，「境遇」的な意味のみを担うこととなる。

移動動詞は，いくつかの観点からその内部で，細分をすることができる。これはしかし「あわせ動詞」の細分を呼び起こすほどのカテゴリー的なものではない。

が以下，例を引用するのに，アクセントを付ける程のつもりで，こころみにいくつかを揚げてみよう。

移動そのものをあらわすとしかいいようのない移動動詞がある。

例64　彼と彼の妻だけがよろよろと歩く二本の立木のやうに動いて行った（有島）

移動動詞のうちには，移動をあらわすとともに，移動にともなう，というよりは移動を実現させ

ている特有の動作をあわせ表現しているものがある。これらは，たまたま移動の方向については比較的無頓着ないわば指向性の弱いものであることが多い。「ゆく・くる」が結びつくと，もちろん「境遇」的な指向性が強められるが。

例65　まっすぐに歩いてゆくと，向こうから早苗とミサ子が子どものように走ってきた（栄）

例66　道のずっと向うから，かん高く悲鳴をあげながら，駈けてくる白い犬がいる（佐多）

例67　そうして先生といっしょの方角に泳いで行った（漱石）

例68　……水色の蟹が敷居の上をゴソゴソ這って行く（芙美子）

例69　山の方からは五位鷺が鳴きながら，飛んで来る……（直哉）

これらの動詞と「ゆく・くる」の組み合わせのなかには，むしろ「ゆく・くる」が移動の意味を担い，動詞はもっぱら移動の手段・方法をあらわしているような場合もある。このようなものについては「あわせ動詞」として考えることはできないのではなかろうか。

例70　「まだ電車も自動車もありませんよ」
「勿論歩いて行くんですよ」（芙美子）

例71　あ，心配しなさんな。風の日は歩いていくよ（栄）

他の多くの移動動詞は，移動を実現させている特有の動作をあらわすというよりは，移動そのものの特質を指し示しているといってよいであろう。これらはたまたま比較的強い指向性をもっているものが多い。

例72　……一隻の伝馬船は，紺がすりのモンペ姿のひとりのやせて年とった小さな女を乗せて岬の村のほうへ進んでいった。（栄）

例73　相生のごたごたした町から，那波村の百姓家の方へ，静かさを求めて移ってゆく人も多かった（佐多）

例74　三時になるとお茶が出て。八ッ橋が山盛り店へ運ばれて来る（芙美子）

このうち，とくに移動の過程における道すじの特徴を語彙的意味のうちにふくんでいることで一とまとまりにすることのできる動詞のグループがある。特有の「を」格の状況語をとることで，それと知ることができる。

例75　彼は故と鮨屋の前を通っていった（直哉）

例76　この冬スキイ場でなじみになった男達が夕方山を越えて来たのに出会い……（康成）

例77　……電車は新富座に突きささりそうに朽ちた木橋を渡って行く（芙美子）

例78　私たちは村を横に突っ切って行った（佐多）

例79　道を廻ってゆくと，ぱっと展けるように，花の一ぱい咲いている山の下へ出た（〃）

例80　深い思いに沈み乍ら，丑松は聲のする方へ辿って行った（藤村）

きわめて指向性の強い移動をあらわすものに，「でる」「はいる」がある。これらの動詞は空間を，内と外に二分し，その一方から他方へと移動がおこなわれることをあらわしている。

例81　然し直ぐ或勇気を起して暖簾の外へ出て行った（直哉）

例82　客は仙吉を待たせて中へ入って行った（〃）

例83　エルが……箱の中から出てきて……（佐多）

もっとも，つぎの例は，(b)のタイプに入れられるべきは明らかだろう。

例84　あらそれは今朝の新聞に入って来たんでしょう（佐多）

「でる」「だす」「こむ」などを成分とする強い結びつきのあわせ動詞も「でる・はいる」の仲間である。

例85　章子の家からは晃一が飛び出してきた（佐多）

例86　降りる人が降りてしまうと，どやどやと入り込んできた……（佐多）

例87　波は……船の片側から片側へ暴力団のようにあばれ込んできて，流れ出て行った（多喜二）

移動動詞のなかには，おなじように強い指向性をもつもので，上下軸での移動をあらわすグループがある。

例88　監督はプリプリしていた。何度も漁夫の室へ降りて来て，又上って行った（多喜二）

例89　麻なわが，こまかくふるえながらさがって行った（千葉）

例90　私は朝の掃除の時は，四階の倉庫へ昇って行って，顔の上まで積み重なるほどの本を抱えて，狭い，急な裏梯子を降りてきた（佐多）

例91　そこから雪は浪々としてとめ度なく降って来た（有島）

例92　……東京のまちには，まい日まいばんばくだんが雨のようにふりおちてきました（土家）

「出かける」「もどる」も指向性の強い移動動詞である。これらは，移動の起点と移動の方向とのかかわりをとくに問題とするところに特徴がある。

例93　日曜日の日，竜岡が誘いにきて，父は洋服に着更えてどこかへ出掛けて行った（佐多）

例94　お店から一日ひまをもらうと，寒い風に吹かれて京都へ発って行った（芙美子）

例95　靴をはくのは職員会議などで本校へ出むいてゆくときだけ……（栄）

例96　朝，魔法の橋をかけた海を，先生は今，痛さをこらえながら，かえってゆく（〃）

例97　改めて階下の便所へ行ってから部屋へ戻って来た（佐多）

つぎの用例は，むしろ(a)のタイプに入ると考えるべきで，このときの「くる」は，それをしてのち，また戻ってくるという意味を暗黙のうちにあらわしている。

例98　明日は，土曜日ですから，日曜にかけて一度行田に帰って来たいと思いますが（花袋）

例99　……父はみんなお金を持って一人で，東京へ行ってくる，と突然出掛ていった（佐多）

移動動詞のなかには，つぎの「近ずく」「遠のく」などのように，行為者とあい手との両者の間の距離を問題とするものがある。

ところで「ゆく・くる」も「あわせ動詞」に近ずく，遠のくの意味を添えるのであったが，これは話し手の視点に依る相対的なもので，もちろん混同して考えてはならない。

例100　さういう荘重ぶった恰好で近よって来た（本庄）

例101　そして，更に驚いたことには，本当に買い手が寄って来たのだった（整）

例102　それをひくかけごえは……こっちにちかずいてきました（つちや）

例103　……大石小石！と呼びかける声が遠のいてゆく（栄）

例104　幅ひろい櫓足をひいて，走るように対岸の町をさして遠ざかってゆくのだ（〃）

例105　それでいかにも男の子らしくあっさりと離れてゆくうしろ姿を……（〃）

同様にあい手との関係（距離というよりは）が問題となるものに「追う」「にげる」の対がある。

例106　章子が晃一を追って来て……（佐多）

例107　唖然とした私は……その男の後を追って行った（芙美子）

例108　……長崎の沖から逃げてきた浜という若者を……（〃）

このタイプを形式的に特徴づけているのはすでに例に〜〜で示したように「〜から」「〜へ」という形のかざりの語が付くところに求められる。(b)とのちがいは，いうまでもなく，(b)は「動詞」単独ではこの形のかざりの語をとることはたいのに対し，移動動詞はそれをとり，むしろそのことに移

動詞たるゆえんがあることである。

(7)

以上，空間的カテゴリーに属する三つの主要なタイプについて述べてきたが，この三つのどれかに分類し，帰属させてしまっては不自然さが残る用例を指摘しよう。

これを空間カテゴリーの第四のタイプ(d)として認めておこう。が，こうして空間的なものとしておくのに，いく分かのためらいが感じられるのは，このタイプの「あわせ動詞」は，かならずしも行為者が実際に「ゆく・くる」という移動動作をすることをあらわすわけではないからである。

強いていえば，このタイプは，行為・動作の抽象的な「作用」が何らかの対象にむけられるその方向を，語り手の視点から観察，記述したものと見ることができる。

このタイプをつくる動詞の典型には「作用」がむけられることをとくにあらわす語構成的特徴をもっている「〜かける」の形の動詞がある。

例109　もしも栄が肉親の者であったら，あるいは彼はその懐に抱かれるような気持で自分を投げかけて行けたかも知れない（直哉）

例110　……それに何よりも理路整然と打ち込む隙もなく話しかけて来られるので……（潤一郎）

例111　チェーホフの吐息は，姿は，みな生きて，黄昏の私の心に，何かブツブツものを云いかけて来る（芙美子）

例112　……あのひとの兄さんが，私をオイオイと後から呼びかけて来た（〃）

これらの他，つぎのような例も明らかにこのタイプの用例とみてよいであろう。

例113　……夫はいきなり束子や茶碗を私の胸に投げつけて来た（芙美子）

例114　……なお，抱かれるつもりか，身体をむやみに彼の方に屈げて来た（直哉）

例115　……お栄の方から誘惑して来る場合の想像であった（〃）

例116　謙作は万々断られることはないと信じながらも，こういう慶太郎に打明けて行くことは何だか気が進まなかった（〃）

とくに，むけられるのが一種の情報で，しかも遠隔地でのような場合，手紙などの媒体が利用されるが，こうしたことがらを表現するにも，おなじように「あわを動詞」が発達していて，慣習的に用いられている。情報といっても，この場合，ある行為によってひきおこされたものがむけられるという意味で，「作用」一般のうちに理解してよく，これらの「あわせ動詞」もこの(d)のタイプに分類してよいであろう。

例117　あなたは返電をかけて，東京へは出られないと断わってきましたが……（漱石）

例118　お母さんが例のリュウマチで，体具合が悪いと云って来た（芙美子）

例119　が，それッ切りだった。もう打って来ない（多喜二）

例120　……実家から時々窮乏を訴えて来るけれど……（四迷）

ところで，この「くる」に対しては，その対立としては通常の「ゆく」は用いられず，「やる」がこれに代っている。

例121　……それに手紙を出してしまうと，もっと早くそれを言ってやるべきだった，というようなことをこの二三日しきりに考えていた（直哉）

例122　……直ぐに雪子を寄越すように云ってやったのが，月のうちの二十九日であった（潤一郎）

例123　クマが，タノミがどんな女か顔を見たいから写真を送れといってやると，二人で写したあまりはっき

りしない素人写真を送って来た（重治）

(8)

時間のカテゴリーにおける「ゆく・くる」のつくる「あわせ動詞」については，解らないことの方が多いが，いまのところ一応，三つのタイプに分け得るのではないかと考えられる。

すなわち，

(e)　時間の推移のうちに，「動詞」の指し示す行為がなされること，いわば行為の持続的な進行をあらわす。

(f)　能動的な行為の，それ自体が進行すること，いわば展開的な進行をあらわす

(g)　状態変化の進行をあらわす

の三つである。

このうち，(e)，(f)は行為をあらわす動詞からつくられ，(g)が状態変化をあらわす動詞からつくられるのに対立し，また(e)が持続的進行をあらわすのに対して，(f)，(g)は行為・状態変化の展開的進行をあらわす点で共通の性格をもち，対立している。

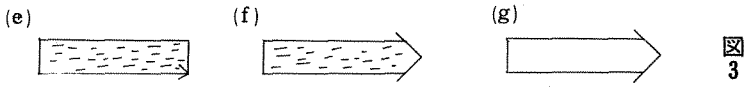

図3

これらのタイプの違いは，基本的には，「動詞」の語彙的意味のカテゴリー的性格に依っている。

(e)のタイプの「あわせ動詞」をつくる動詞には，一定の精神状態をあらわしたり，人生的ニュアンスを持つものが多く，(f)をつくっているのは，対象にはたらきかける行為で，なおその行為がより深化したり展開したりすることを問題とし得るような動詞であり，(g)は，状態の変化にかかわる自動詞である，などである。

(9)

すでにのべたように，時間のカテゴリーのうちの(e)のタイプの「あわせ動詞」は，「動詞」の指し示す行為が一定の期間持続してなされることをあらわしている。

この場合の「ゆく・くる」は空間における移動に対して，行為のなされている時間の経過をあらわしていると考えられる。

もちろん，「ゆく・くる」の「境遇」性は時間のうえにも移し入れられていて，語り手が想定する「いま」＝視点（時間のうちにおける）に対して，それ以前からそれまでの行為の持続は「くる」で，その時点から以後へむかっての行為の持続は「ゆく」によってそれぞれあらわされる。

空間的「ゆく」「くる」のイメージはアナロジカルに保存されており，このタイプがあらわしている意味は，より正確には，持続的進行とよぶのが適当であろう。

このタイプをつくる動詞の語彙的意味の特徴は，いまのべたような「ゆく・くる」に載り得るものであればよい。このうちとくに典型的と思わをる動詞のグループをいくつか挙げてみよう。

内面的，心理的な動きを指し示す特定の動詞は，「ゆく・くる」と結び付いて，何らかの精神的状態が持続することをあらわす。

例124　おれは彼の芸術を愛して来たし愛している（重治）

例125　……そういう感じが，玉枝などが子供の時から感じて来ている「海」というものであった（島木）

例126　喧嘩をしながら，実社会の闘争に耐えてゆく力をやしなっているらしい（達三）

何らかの努力や心くばりなどをあらわす動詞も同様である。

例127　神も照覧私は精一ぱいに努めて来たのだ（太宰）

例128　組合活動をとおして吾々は，教育環境，教育条件の改善に努力して来ましたが……（達三）

例129　……この法律の理想を実現するためにどれほどか心を砕いてきたのであった（〃）

例130　この家一つは何とか守って行くつもりだ（太宰）

人生を生きること，生活することに関する動詞，「生きる」「暮す」などと「ゆく・くる」の結びつきはとくにひんぱんである。

例131　笛を吹き，羊と遊んで暮して来た（太宰）

例132　……乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらえてきた年月を勘定してみました（漱石）

例133　……家族が食ってゆくことだけならどうにか出来るだろう（整）

例134　これから後，自分がそういう大人たちの世界に混って，生きてゆくことが私にはできないように思った（整）

さらに一般に，一定の状態，行為の持続的進行をあらわすために，便利な用法とみえて，さまざまの動詞がこのタイプの「あわせ動詞」の形で用いられている。

例135　しかし今となってはその孔だらけの皮膚をさらして行く外はなかった（重治）

例136　……つまりは自分のうちにあるそういうものを対手に戦って来たと考えないわけには行かなくなった（直哉）

例137　……豊かでない家計と営みながら独身を通してゆく女の……（野間）

例138　……そのために教育現場をおろそかにするようなことは，極力避けて来たつもりです（達三）

例139　学校とＰＴＡとは協力して行かなくてはならない（〃）

注目すべきものとして，「つづける」あるいは「～しつづける」というあわせ動詞が行為の持続，継続をあらわすために発達しており，「ゆく・くる」がこれに，とくに進行の意味を付与するかたちで結びつき持続的進行が強調してあらわされる「あわせ動詞」がある。

例140　……と言われながら，ともかくもこれまで努力をつづけて来たわけです（達三）

例141　……貧乏に追われながらも教育への情熱を失わず，勉強しつづけて来た彼……（〃）

例142　苦闘しつづけて来たものの剛腹な意志と精力とは……（島木）

例143　……一日から朝からカーボン紙の上にかがみこみ続けて来て……（重治）

例144　……彼等の同人雑誌そのものを存続させて行く仕事を……（〃）

さて，このタイプのなかには，持続的進行というよりは，ある時期に何らかの行為をしたり，あるいは何らかの状態にあり，それを経る，すなわち何らかの経験がなされるという意味をとくにあらわすものがある。この場合も，何かを為す経験そのものは，事実として存在しつづけるわけで，持続の枠のなかにあると見てよいのである。

例145　おばあさんなんか，さんざん若い時に贅沢をして来たんでしょう（佐多）

例146　そういう別れ方は，今まで何度となく経験して来ている（太宰）

例147　……というような実際の場合を短い期間ではあったが，玉枝は余りにも多く見聞きして来た（島木）

例148　もはや六十を越え，恐ろしいものも苛酷なものも見尽して来て……（〃）

このタイプを形式的に特徴づけているのは「あわせ動詞」を飾るかざりの語として「～から」「～まで」に代表されるような時を示すものをとり得ることだろう。

例149　藤堂は，安吉が長い間愛して来た作家の一人で……（重治）

例150　……明日から私は一体，何をして生きてゆけばいいのか（達三）

例151　彼はそのために今日まで生きてきたといってもいいくらいなのです（漱石）

例152　お互に何事も今まで打明けて来た関係だのに……（四迷）

例153　昨日一ぱい，また今朝の六時からがんがん鳴るのを聞き続けて来たような気持である（重治）

例154　お前は，長い間，苦労ばかりして来たのでよく人をうたがうけれども……（芙美子）

(10)

時間のカテゴリーに属する(f)のタイプの「あわせ動詞」は，「動詞」が指し示している行為それ自体がより深く進行，展開することをあらわす。

(e)との対比でみると，(e)は，行為がなされつつ時間が経過するというニュアンスが強いのに対して，時間の経過は背後に退ぞいていて，もっぱら，行為そのものの進行過程が問題とされるのが(f)のタイプである。こうしたことから，このタイプの意味を展開的進行と呼んで置くこととする。

このタイプをつくる動詞は，動作や行為の深化，展開が自然に問題となり得るものであればよく，典型的なものを特定することは難かしい。が，行為の深化，展開が線条的イメージとして描き易いものなどは，それとして挙げてもよいのではなかろうか。

例155　ああ私はこう書いて来て本当に涙ぐむのである。（整）

例156　読んで行くうちに，審美論の処になって，金井君は大いに驚いた（鴎外）

例157　……井谷がいつもの急ぎ込むような早口でしゃべるのを聞いていると，随分この人はと思うところもあったけれども，段々聞いて行くうちに……（潤一郎）

例158　……講義をずんずん筆記して行く能力が彼にはいつのまにかなくなっていた（重治）

例159　野蛮人の襲撃を受けたり，自然の暴虐に打ち壊されては，又立ち上り，一間々々と鉄道をのばして行く（多喜二）

前の(e)のタイプでの「～つづける」に当るような，「～すすむ」の形の動詞があって，行為の展開的進行をよりきわだったし方であらわすものもある。

例160　その苦難の歴史を読みすすんでゆくと，尾崎ふみ子は胸苦しくなってくるのであった（達三）

これらの他にも，様々な動詞が，このタイプの「あわせ動詞」をつくっている。他のタイプにくらべて，用例がかなり少なく，また(e)と紛らわしいが，とにかく，独立して存在しているものと見ておきたい。

例161　ただ自分は自分たちの仕事を積み上げて行く……（直哉）

例162　学問は……自分の学問として生徒が築いて行くのでもいいし……（整）

例163　……学問という枠がきまっていて，それを埋めて行けばいいことが分っていた（〃）

例164　四方から一時に起るかのような声を振り手は聞きわけてさばいてゆく（島木）

ほぼ同一の動作や行為がくり返されて進行することをあらわす「あわせ動詞」もこのタイプに入る。この場合，「～ずっ」「つぎつぎに」などのかざりの語がくり返しを具体的に示すのが普通である。

例165　隅から隅まで一冊ずつ点検して行った（漱石）

例166　数年間蓄積した詩を毎月四五篇ずつ発表していった（整）

例167　彼女は与えられるものを，途中でやめることなしに，一冊ずつ読みあげていった（島木）

例168　……耕吉は行李の底に残してあった日記とかノートとかいうようなものをそこへ持ち出して来て，

次々に破り棄てていった（〃）

例169　田植のために休んだ子供たちには，その後の授業のなかで少しずつ取り返してゆけるように…（達三）

以上の若干の例からも明らかなとおり，～～で示したかざりの語（構文論的にいえば修飾語）が添うことで，表現がより具体化されることが多いが，飾られているのは，単に「動詞」の部分だけでなく「あわせ動詞」全体と考えられ，しかも「だんだん」「～ずつ」のように，ことがらの変化や行為の展開のようすを，くわしく示す語であることなどは，このタイプを項目としてたてることの妥当性を示しているものと思われる。

これに加えて，このタイプを他から区別する特徴はといえば，いわゆる構文論の状況語のレヴェルで見れば，行為の展開的進行の致達点を示す「～まで」のようなかざりの語をとることがあることを挙げ得る。

例170　そこまで考えてくると，尾崎ふみ子は校長先生に抗議をする気持をうしなった（達三）

これは，一応，前の(e)タイプが時をあらわすものをとることと対立すると見ることができる。

が，(f)のタイプで，時をあらわすかざりの語を取り得ないかといえば，いわば時の一般性に依って，そうともいえず，これらは決定的な特徴とはいいがたいようである。

(11)

最後に，時間のカテゴリーの(g)のタイプについて。

このタイプの「あわせ動詞」は，(f)と同様に展開的進行をあらわすが，これをつくる動詞の語彙的意味に著しい特徴をもっている。すなわち，この動詞は，もっぱら，ものの状態の変化を指し示している状態変化動詞とでも呼びうる動詞である。この動詞は，自動詞でありまた無意志動詞でもある。

従って「あわせ動詞」のあらわす意味は，何らかのものやことがらの状態の変化の展開的進行である。

この種の動詞の下位区分は，いまのところはっきりしていない。そしてまた，その区分が「あわせ動詞」の細分を呼び起こすようなものでもない。が，一応，移動動詞の項でしたように，語彙的意味，及び語構成的な視点からの簡単な区分に従って例文を引用していこう。

変化そのものを一般的にあらわす状態変化動詞がある。

例171　けれどもその事があってからのちなんです。先生の性質がだんだん変ってきたのは（漱石）

例172　……政府の方針はしだいに変ってきた（達三）

例173　そして，そのわらい声が，だんだんうつくしいうたごえにかわっていきます（木下）

例174　愛し方は変化して行っても互に愛し合う気持は変らない（直哉）

ものの物理的な状態変化にかかわって，形の変化，いわゆる三態間の変化，温度の変化，色彩の変化などをあらわす動詞がある。これらは比喩的に転用される場合も多い。

例175　……あべこべに，おかあさんのこしは，すこしずつまがっていったそうな（大川）

例176　……理想が現実にふれて次第に崩れて行く一種のさびしさと……

例177　足の下の畳までが冷えて来るので……（康成）

例178　またしても自分の言葉の描くもので体まで温まって来る風であった（〃）

例179　この雪はこの一尺ばかり降ったのが，だいぶ解けて来たところです（〃）

例180　秋になりました。私の唇も冷たく凍ってゆきます（芙美子）

例181　物の輪郭が圓味を帯びずに，堅いままで黒ずんで行く……（有島）

様々な次元における量の増減を指し示す動詞がある。

例82　その名誉はどこの家の門口をもかざって，恥をしらぬようにふえていった（栄）

例183　仕事の高は眼の前で減って行った（多喜二）

生命をもったものの成長，変化等をあらわす動詞がある。比喩的に用いられることも多い。

例184　その根本精神をいまのうちに強く植えつけておけば，あと15年もたったら実ってくるだろう（達三）

例185　だけど，私は何かしら老いて行く事をひどく恐れはじめています（芙美子）

何らかの生理的状態の変化をあらわす動詞がある。

例186　……皆と同じ速さで歩かないわけにはゆかず，謙作は段々疲れて来た（直哉）

例187　私はなぜか恥をかきに来たような気がして，手足が痺れて来るおもいだった（芙美子）

例188　歌の頂点まで飢えてくると……（〃）

心理的活動をあらわす動詞，またそのうちとくに知覚や認識にかかわる動詞は，「ゆく・くる」と結びついて，心理状態の変化の進行をあらわす。

例189　その洋傘が色んな形に見えて来る（芙美子）

例190　真実に何だか人生も楽しいものに思えて来た（〃）

例191　茂雄は急に寒さと空腹とを感じて来た（島木）

例192　急に自分のことが解って来たのである（藤村）

例193　彼は自分以外に世界のあることを少しずつ悟ってゆくようでした（漱石）

これらの動詞のグループには，さらに「形容詞の中止形＋なる」という語構成によってつくられるあわせ動詞がくわわって，いっそう豊かに状態の変化が記述，表現し得るようになっている。これと対立する「形容詞の中止形＋する」は，状態を変化させる能動的行為をあらわし，これは主として(f)のタイプをつくっている。

例194　それはそうと，馬鹿に寒くなって来たぢゃないか（藤村）

例195　だが，だんだん声の低くなって行くのが分るではないか（多喜二）

例196　風は益々強くなってくるばかりだった（〃）

例197　……やがてそれを読むのは苦しくなってきた（藤村）

例198　……私は子供のように悲しくなって来て……（芙美子）

例199　……遠くに去った初恋の男が急に恋しくなって来た（〃）

このほかに「なる」から構成されるものとしては「第二形容詞の中止形＋なる」があり，また「副詞＋する」の形で構成されるものもある。

例200　12年前から……不況が深刻になって来ていた（整）

例201　……この朝の青々とした新鮮な空気を吸うと，ほんとうに元気になって来る（芙美子）

例202　……暑くなると妙に気持が焦々してきて……（〃）

例203　こんなことなんか平気だと気持が晴れ晴れとしてきた（〃）

例204　今の汽車に乗っていたのかと思うと彼の空想は生々して来た（直哉）

例205　……それが丁度私が一番弱って，気持が少しぼんやりして来た時なんです（〃）

ところで，このタイプの「あわせ動詞」の意味は，状態の変化の進行と述べて来たが，基本的にはこれに尽きるとはいえ，「ゆく」と「くる」の対立にかかわっていま少し厳密な論議が必要とされるようである。というのは，

例206　夕方からちよっと生あたたかかったのが，とうとう降り出したらしい。雨の描いた線は，はっきり

と小さな点でつながって二筋三筋とふえた。

「降ってきましたね」

「降ってきたかね」

の例で明らかなように，「くる」のつくるものに限って，「～して　くる」は，「～しだす」「～しはじめる」の意味をとくに強く表現することがあるからである。

例えば

例207　塩鮭の焼けてきたにおいが部屋じゅうに立ち迷う（達三）

例208　……雨も止み，日は高く昇って，そろそろ暑くなって来た（太宰）

などは，いまのべたような意味が強い。例207でいえば，塩鮭は，焼けはじめのある状態に至ったという感じが与えられる。

そこで，これらを新たに別のタイプとして立てることも可能ではある。が，ここではむしろ(g)のタイプに包括しうるもの考えておきたい。というのは，このような観点から(g)のタイプとして例示したものを眺めわたしてみると，「くる」のつくものはほぼ共通して「～はじめる」のニュアンスを担っており，実は，この点に，(g)のタイプの「ゆく」と「くる」の対立の内容があるのではないかと思われるからである。

状態の変化といった場合，ある状態相の内部における程度にかんする変化と，ある状態から別の状態相への移動的変化とを想定することができる。

図4

いまいえることは，「くる」はこの移動的変化における，いま閉曲線で画いた境界の部分を越える局面（まさに越えた局面）をとくに強調して表現するはたらきがあるということであり，そのようなものとして表現しうるような，語り手の観察の視点が「くる」にはあるということである。

これに対して「ゆく」は，その局面に関してはやや無頓着である。

例209　……アダリンを1箇寝しなに飲ますようにしてみたが，1箇ではなかなか利いて来ないし…(潤一郎)

例210　……かえって「サボ」が効いてゆくのを見ると……（多喜二）

例211　他人の家の飯を食うことにはかなり慣れて来ている彼女も……（島木）

例212　ユキもだんだん慣れてはゆく（〃）

これらの例における「ゆく」と「くる」の対立のニュアンスも以上にのべてきたものとして解釈しておきたい。

また，「～だす」「～はじめる」にすら「くる」の付いた例のあるところを見ても，これらのあわせ動詞の意味には解消し得ない，まさに進行のニュアンスがあるものと見ることができる。

例213　少しばかり原稿がうれだして来ると……（芙美子）

例214　そしてなるほどそうであろうとも思いはじめてきた（重治）

最後に，このタイプを形式的に特徴づけるものとしては，(f)のタイプの場合と同様，「だんだん」「しだいに」などの変化の過程を具体的に記述するためのかざりの語の結びつきが頻繁であることをあげておこう。

〔注〕

1）　奥田氏に「もってくる，もっていく……のようなあわせ動詞があって」とあるのを借用した。奥田靖雄「日本語文法・連語論，を格の名詞と動詞とのくみあわせ㈠」，『教育国語』12 1968

2）　『文法教育』には，「－して　くる」の形（近ずき態）1近よる動作，2動作のはじまり，3動作の進行，「－して　いく」の形（遠のき態）1遠ざかる動作，2動作の進行と分類されている。教科研東国語部・言語教育研究サークル『文法教育』1963

3）　語が，語彙的意味のうちになっているカデゴリー的性格も形式とよばれるべきであり，ここで内容というのは便宜的にすぎ適切ではない。奥田靖雄「言語における形式」『教育国語』35　1973

4）　森田氏は「ゆく・くる」の付く「あわせ動詞」を，移動，継続，発生，変化等に分類し「これらの別は先行動詞によっておよそ決定づけられるわけであるが，しかし，たとえば「書いていく」は「書き進める」（進行）ともとれるわけで，必ずしも先行動詞のみでは決定されない。……文脈がその意味を規定する」とのべている。森田良行「「行く・来る」の用法」，『国語学』75集　1968

5）　構文論的には状況語というべきであろうが，ここで問題とするかぎりでは，ことがら的意味の側面での，かざり－かざられの関係につきるので連語論的な「かざり」の意味でかざりの語とした。参照，奥田靖雄『国語科の基礎』1970

6）　三上氏は，話し手との関係がその語の意味の一部をなしているような語を「境遇性のある語」としている。三上章『現代語法序説』1953

〔付記〕

この研究の方法は，奥田靖雄氏，鈴木重幸氏らの日本語文法に関するすぐれた研究に依っている。執筆に際しては北大教育学部学校教育研究室・国語教育グループの鈴木秀一氏，安増京子氏による検討と貴重な示唆をいただいた。